

ミサとはどんなものだろうか？

ミサの流れを簡単に把握しよう

カトリック教会のミサは信仰に関心のある人であれば無料で参加可能。予約も必要ない。聖書も用意があるため持参の必要はない。分からないことは周りにいる参加者に声をかけると親切に教えてくれる。※カトリック教会のミサはこの教会でも流れは同じ。

1 開祭

司祭が入堂し、祭壇につく。入祭の歌、あるいは入祭唄を唱える。そして最初の祈りを唱える。可能であれば開祭10分前には入場して司祭の入堂を待ちたい。

2 ことばの典礼

聖書および使徒の書簡(パウロの手紙)などの一節が朗読される。司祭による先唱の後、参加者の復唱が交互に繰り返される。続いて司祭による説教がある。

3 感謝の典礼

パン(ホスチア)、ぶどう酒、水が祭壇へ奉納される。続いて捧げられる祈りと賛歌によって、パンとぶどう酒がキリストの体(聖体)と血に変わると見なされる。

4 交わりの儀

司祭が聖体を食べ、御血を飲む。続いて聖体を信者に配られる。神と人との交わりを意味し、参加者が同じ聖体を受けることが重要な、ミサの主体である。

5 閉祭

司祭と会衆との間に交わされる「最後の交唱」でミサは終了・閉会となる。お知らせの連絡が行なわれたり、「閉祭の歌」として聖歌が歌われることがある。

カトリックとプロテスタントの礼拝の違い

カトリック教会で使われる「ミサ」という言葉は、プロテスタント教会では使われず、単に「礼拝」と呼ぶ。その内容は、どちらも祈りや賛美歌、聖書朗読、説教などが行なわれることに違いはない。しかし、カトリックのミサではその順序がしっかり決められているのに対し、プロテスタントでは教会ごとに異なる。プロテスタントでは特に聖書朗読や説教に重きがおかれ、礼拝の時間の相当数が割られる。また、カトリックの聖体拝領はパンがイエスの実体であるという認識なのに対し、プロテスタントでは、聖変化という認識はなく、パンは最後の晩餐における記念としていただくという考え。カトリック教会が毎回必ず聖体拝領を行なうのに対し、プロテスタント教会ではパンの配布は必須ではない。



聖体拝領。信徒たちが司祭の前に列をなして、平たい菓子「ホスチア」(パン)を受け取る様子。

「昔は平日でも1日に5回、ミサを行なっていました。現在は平日3回、主日の日曜は4回です。参加者は減ってしまいましたが、熱心に通ってくださる方が多いですね。もちろん、初めての方も来てくださいます。教会はすべての人に開かれた場です。で、キリスト教徒以外の方も気軽に参加していただきたいです」
そう話すのは、聖イグナチオ教会 助任司祭のハビエル・ガラルダ神父。スペインのマドリッド出身で、1958年に来日してから59年。86歳の現在も多忙な日々を過ごす。教会で

ガラルダ神父が語る 現代の教会の役割

「昔は平日でも1日に5回、ミサを行なっていました。現在は平日3回、主日の日曜は4回です。参加者は減ってしまいましたが、熱心に通ってくださる方が多いですね。もちろん、初めての方も来てくださいます。教会はすべての人に開かれた場です。で、キリスト教徒以外の方も気軽に参加していただきたいです」

「その他に教誨師として府中刑務所、東京拘置所にも出張し、そこでもミサや個人面談を行なっています。特に拘置所での死刑囚との面談では未来や死のことについては話せないため、主に聖書の内容について話し合います。彼らは興味を持って対話してくれます。彼らから学ぶことも多いです。私は友人に対するのと同じ姿勢で会うよう心がけています」
神の教えを分かち合いながら、人々が親交を深める場である教会。価値観が多様化し、複雑化する現代にあっても、その役割は根本的な部分において不変であるのだろう。

【ミサ以外の教会の主な役割】



聖堂の一角にある小さな告解室。ここでは自分の犯した罪や過ちを聖職者に告白し、神から許しと和解を得る。カトリック教会では「ゆるしの秘跡」や「懺悔」、プロテスタント教会では「罪の告白」とも呼ばれる。そして結婚式はもちろん、その前の心構えを解くグループ制の講義も行なわれる。成人式や七五三、正月のお祝いなどあらゆる日本の行事が行なわれる。



ハビエル・ガラルダ神父

上智大学名誉教授、聖イグナチオ教会助任司祭。1948年イエズス会トレド管区アランフェス修道院へ入会後、1958年に初来日。上智大学外国語学部スペイン語学科、文学部で長く教鞭をとり、2002年に退任。同年に名誉教授となる。

はじめてのミサ

【礼拝】

信者でなくても参加できる開かれた教会儀式

ミサはクリスチャンだけでなく、キリスト教に関心があれば誰もが参加できる開かれた場でもある。「初めてのミサ」に参加してみよう。



昼休みに足を運ぶ 近隣の会社員も多数

JR「四ツ谷駅」のすぐそばに建つ、聖イグナチオ教会。円形の主聖堂内は祭壇を取り巻く約800の座席があり、大きな天井窓からは陽光が優しく差し込んでくる。

「主のみ使いのお告げを受けて。アヴェ、マリア、恵みに満ちた方、主はあなたとともにおられます。あなたは女のうちに祝福され、ご胎内の御子イエスも祝福されています。神の母聖マリア、私たちのために祈ってください」(後略)

アナウンスに合わせ、参加者たちが「お告げの祈り」を復唱。それが終わると、鐘の音が鳴ってミサの始まりを告げる。この空間では、例えキリスト教徒でなくとも穏やかな気持ちになり、司祭が話す言葉にも、じっと耳を傾けたくなっていく。

初参加のミサは、平日の昼12時からの回。参加者は100人程だろうか。夜や土日は当然もっと大勢の人が来るといふ。途中からの参加者も多い。昼休みを利用して参加していると思われる近所の会社勤めらしい人の姿も多く見られた。

ヴェールをかぶっている女性も2〜3割ほど見られたが、大半の人は何も被らず、そのまま普段着で参加していた。脱帽すること、露出の多い服装は避けることなど、常識的な範囲であれば、特に服装の制限はな

いようだ。

旧約聖書に含めてある書物のうちのひとつ「シラ書」より「すべての知恵は、主から来る。主と共に永遠に存在する」という一節が読み上げられ、同じく復唱の後は、新約聖書の中の「マルコによる福音書」の一節が紹介された。汚れた霊に取りつかれた子供を癒すキリストの姿を読み上げ、「私たちに会う人たちが少しでも癒され、少しでも生きる喜びを感じる事ができますよう」と司祭は結んだ。日によって読まれる聖書の箇所は異なるようだ。

ミサの最中、このように司祭による聖書の読み上げ、参列者による復唱が続く。また「立ちましょう」「座ってください」という合図のもと、その動作が交互に繰り返される。

司祭が朗読する聖書の言葉や説教を聞く際は座って黙想し、立つ際は心と声を合わせて復唱する。それぞれの動作にも意味があるのだ。

そして、メインの儀式といえる「交わりの儀」の聖体拝領。聖体とは、ぶどう酒、パン(ホスチア)のことで、キリストの血と体を意味するものである。司祭がそれを配布し始める。信者らが列をなし、ビスケット状のホスチアを受け取る。ただし、洗礼を受けていない一般参加者は受け取ることができない。その代わり、並ぶことで祝福を受けられる。ミサの所要時間は約30分。会社員の人々が昼休みに参加できるよう配慮



聖イグナチオ教会

東京都千代田区麹町6-5-1
☎03-3263-4584
(ミサの時間) 平日 7:00/12:00/18:00
土曜 18:00 日曜 7:00/8:30/10:00/18:00
詳しくは ignatius.gr.jp/



上智大学の四谷キャンパスに隣接する教会(左)。イエズス会が運営している。上はミサが行なわれる主聖堂。